

てん菜種子の登熟に関する研究 第3報 てん菜の分割母根  
に対する高温長日処理が開花結実ならびに子実の発芽に及ぼす影響

安部秀雄・山本保・村井修

少量の母根から多量の種子を得る方法として母根を分割によって増殖を計るが、その分割母根の多収を得るために GW - monogerm を用いて 65 日間約 20°C の高温長日処理と 31 日間の露地における長日処理を行った結果つぎのような成績が得られた。

1. 生育及び抽苔,開花,成熟日に及ぼす影響

高温長日処理を行うことによって,2月中旬に抽苔が始まり,3月28日に開花し,5月下旬に収穫が可能であり普通の直播採種に比較して約40日間早くなり,長日処理のみでは15日早く収穫できることが判明した。

2. 開花結実に及ぼす影響

高温長日ならびに長日処理を行うことによって無処理の42.9%の結果比率と比較して約2倍の72~83%の高い結果比率を示した。その結果無処理の4倍から4.5倍の毬果重を得ることが可能であり,1ポット当りで100g程度の毬果重を得ることが判明した。

3. 千粒重ならびに子実の発芽に及ぼす影響

各処理区とも早く開花したものが重くなりとくに早期に開花させて低温下で登熟させたのは粒が重くなった。子実の発芽歩合は低温下で登熟したものは70.4%と高く無処理は高温下で登熟したため39.6%と発芽比率が劣ることが見出された。

以上の結果から GW-monogerm 級の品種であれば2月下旬頃より約20°Cの温度で高温長日処理を65日間行うことによって,普通の採種てん菜栽培と交雑の心配なしに分割母根を使って発芽率の良い種子を多量に生産出来ることが判明した。